

池田草庵先生に学ぶ会・令和七年六月

「與姪盛」(池田草庵著作集P247～P249)

七月五日(担当・俊彦、左起子、繁子、良子、西村、宮崎、村上)

與姪盛 (一)

覺意蘇魂醒、目明耳聰、向之所_ニ以爲_レ是、
而今或以爲_レ非、向之所_ニ安者、而今或不_レ安焉、

読み

意は蘇_{よみがえ}り、魂は醒_さめ、目は明きらか、耳は聰_{さと}しを覚える、
向の以_{さき}つて是を爲す所は、而今或いは以_{しこん}つて非と爲す、
向の安んずる所は、而今或いは安んぜず、

言葉

意_{さと}|| ころ 思_{さと}い 蘇_{さと}|| よみがえる 醒_{さと}|| さめる
聰_{さと}|| さとーい (さとシ)。わかりがよい。

向_{さと}|| サキに むかう むき

安_{さと}|| やすい やすらか 安んずる

而今_{さと}|| シコン 今にして 今この瞬間

訳

心はよみがえり、魂はめざめ、目は明るく、耳はよくわかること
を自覚する。さきに以て是としたところは、今この瞬間、或いは
非と為る。さきに安らかなところは、今は或いは安らかでないか
もしれない。

日精日察、駸々乎亦不_レ自覺_ニ其進_ニ於善_ニ也、

當_ニ是時_ニ、其惟不_レ言_ニ、言則可_ニ以玩味_ニ也、

読み

日精_{につせいに}日察_{につさつ}、駸々_{しんしん}や亦自ずから其の善に進むを覺えずなり、是の時
にあたり、其れ惟_{ただ}言わず、言は則ち以_{がんみ}つて玩味すべきなり、

言葉

駸々^ニシンシン どんどん進むさま 惟^ニただ もつぱら
玩味^ニガンミ 作品や文章の意味を十分に理解し味わうこと

訳

毎日精を出し、よく考えていくと、時はまたたく間に進んでいるが、自分では善に進んでいるかは自覚しない。この時に、思いは口にしないで、言うなら、言葉は玩味すべきだ、

今汝不幸臥^レ病、已六旬餘、患苦相仍、荏苒不^レ愈、
父母戚屬皆以傷心、

読み

今汝不幸にして病に臥す、已に六旬餘り、患苦相仍^ヨり、荏苒^{じんぜん}愈えず、父母戚屬^{せきぞく}皆以つて心傷む、

言葉

仍^ニよる かさなる 荏苒^ニジンセン なすことなく時が過ぎる
戚屬^ニセキゾク 身内 親戚。

訳

今おまえは不幸にして病で床についている。すでに六十日余りになる。病氣や苦しみはかわらず、なすことなく、時は過ぎてゆくが、病は直らない。父母や親戚の者は、みんな心痛めている。

而獨吾之所慮者、又不止此、何也、
夫臥^レ病已久、則其廢^レ書亦非近也、

読み

而して獨り吾の慮^{おもんばか}る所は、又 、何ぞや、それ
病に臥して已^{すで}に久し、則ち其れ書を廢し、又、近くに非らざるなり、

言葉

已^ニすでに 夫^ニそれ

訳

そして、ひとり私の心配するのは、また、これに止まらず、何

か。それは病に伏してすでに長い時間が経っており、書物を学
のを止めにして、また近くにも置いていない

而けいぼう閨房之内、衽じんせき席之上、意倦體疲、百事懶散、塵垢漸積、腐氣日生、
読み

而して閨房の内、衽席の上、意倦體疲、
ひやくじらんさん じんこうぜんせき ふきにつせい
百事懶散、塵垢漸積、腐氣日生、

言葉

閨房けいぼう|| ケイボウ ねや 衽席じんせき|| ジンセキ 寢床 寢室
倦|| ウむ ぐったりしてだれる 百事|| あらゆること
懶散|| ランサン だらけている
塵垢漸積|| ジンコウゼンセキ ちりとあかが少しずつちくせき
していくようす

訳

ねやの中、寢床の上、やる気もなくぐったりとして、体も疲れ
ている。あらゆることにだらけてしまつて、ホコリや垢が少し
ずつたまつている。やる気のなさは、日ごとに生まれている

而舉動口吻こうふん之間、無復有風趣ふうすい矣、
乃今使し其病幸得復愈ふくよく、

読み

而して舉動口吻の間、復た風趣あることなしか、乃ち今その病、
幸い復た愈えるを得せしめば、

言葉

口吻|| コウフン 口先、口ぶり
風趣|| フウシュ おもむき 風情のある味わい
愈|| イエル 本根|| ホンコン その根本の病は

訳

そして、動作や物言いは、かつて見られた風趣があるというよう
なものではない。今幸い、その病がなおつたとしても、

而本根之病、

則還又有難拔者一矣、

雖然、即今吾非敢教汝讀書、惟知其可慮、

而して本根の病は、

則ち還りて又 難くは有るかな、然りと雖えども、即ち今吾れ
敢えて汝に書を読むを教えざる、惟其の慮^{おもんばか}るべきを知るべし。

言葉

然しシカリ そのとおりである

慮しおもんばかり

訳

その根本の病は

還りみてまた、完治していない。そうであるが、今私はあえてお
まえに書を読むことを教えない。ただ、その思いを知って欲しい。